みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

比較文化論：大項目別報告：死・葬制 4100

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山下, 晋司 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003684

死・葬制　4100

山　下　晋　司*

1.　文化要素の地理的分布
2.　葬法
3.　他界観

1.　文化要素の地理的分布

死・葬制に関する15の文化要素の分布状況は表1に整理することができる。この表では，該当する民族件数を東南アジア（マダガスカル，アンダマン・ニコバル，中国南部をもふくむ）とオセアニアにわけて示したが，このことから死・葬制に関する文化要素の地理的分布状況をつぎの三つのタイプに分類することができよう。

（1）東南アジア・オセアニア両地域にまたがって分布する文化要素：単純土葬，

表1　死・葬制に関する文化要素の分布状況

文化要素（項目番号）	民族件数	東南アジア	オセアニア
1. 単純土葬 (4101)	169	103	66
2. 火葬 (4102)	34	29	5
3. 複葬 (4103)	54	28	26
4. 樹上葬 (4104)	22	11	11
5. 舟（水）葬 (4105)	14	5	9
6. ミイラ (4106)	16	6	10
7. 頭骨保存 (4107)	43	10	33
8. 食屍 (4108)	11	7	4
9. 哀悼傷身 (4109)	24	3	21
10. 甕棺 (4110)	12	11	1
11. 霊魂転生 (4111)	40	32	8
12. 海上他界 (4112)	25	10	15
13. 山上他界 (1413)	29	24	5
14. 天上他界 (4114)	58	39	19
15. 地下他界 (4115)	41	28	13

* 東京大学教養学部

複葬，樹上葬，食屍，天上他界，地下他界。

（2）東南アジアに主として分布する文化要素：火葬，甕棺，霊魂転生，山上他界。

（3）オセアニアに主として分布する文化要素：舟（水）葬，ミイラ，頭骨保存，哀悼傷身，海上他界。

このうち火葬，甕棺，霊魂転生，山上他界はことに東南アジアに，哀悼傷身，頭骨保存はことにオセアニアに濃密に分布している。さらに，哀悼傷身の分布の中心はポリネシアであり（オセアニア21例中11例），頭骨保存のそれはニューギニアとメラネシアである（オセアニア33例中ニューギニア13例，メラネシア12例，計25例）ことを付言しておこう。

断わっておかなければならないが，この類型設定はきわめて印象的かつ暫定的なものである。というのも，東南アジアからの民族入力数とオセアニアからのそれが異なっているので，単純に実数の大小をもって分布の偏りを判断できず，厳密にいえば，なんらかの統計上の処理を必要とすると思われるからである。

さて，こうした概括的な分布状況をおさえたうえで，以下に葬制の実践的側面である葬法に関するものと観念的側面である他界観に関するものにわけていくつかの問題点を検討してみよう。

2. 葬　　法

葬法について，試みに分布頻度の高いものからならべてみると，単純土葬169例，複葬54例，頭骨保存43例，火葬34例，哀悼傷身24例，樹上葬22例，ミイラ16例，舟（水）葬14例，甕棺12例，食屍11例となる。

このうち単純土葬はコンピュータに入力された237の民族集団中169民族において認められる。この数字は174民族に分布するブタ飼育（1321）につぐものである。したがって，単純土葬は東南アジア・オセアニアにおいてもっともひろく共有された文化要素の一つであるといえる。

東南アジア・オセアニアの葬法にきわめて特徴的なのは，複葬の広範囲にわたる分布である。入力データでは，それはマダガスカルからオーストラリアにいたるミクロネシアをのぞくすべての地域に54民族において分布している。ミクロネシアが欠けている理由は筆者にはわからないが，葬制からみると，ミクロネシアは舟（水）葬が濃密に分布している点でも特徴的である。すでにのべたように，舟（水）葬はオセアニ

アにおもに分布するのであるが，オセアニア9例のうち5例がミクロネシアに集中している。

オセアニアを中心とした地域の複葬については，頭骨保存との関連が指摘されている［たとえば棚瀬　1967: 245–248, 655–659］。そこで両者をクロスさせてみると，20民族において重なる。しかもそのうち17例はメラネシアとニューギニアを中心としたオセアニアの民族である。

ところで，一つの民族集団は一つの葬法をもつというより，多くの場合，複数の葬法を同時にもっている。単純土葬，火葬，樹上葬，舟（水）葬，ミイラ，食屍の六つの死体処理法についてみてみると，火葬以外の五つの葬法を同時にもつケースとしてNew Caledoniaが，樹上葬と食屍をのぞく四つを同時にもつケースとしてBurmeseが入力されている。また，三つの葬法を同時にもつ民族は25例（表2），二つの葬法を同時にもつのは102例（表3）ほど知られる。

一つの民族に複数の葬法が存在する理由として，つぎのことが考えられる。第1に，文化史的にみて別の葬法が新しい文化要素として混入したということ，第2に，同じ文化システムのなかで異なった葬法に異なった意味があたえられているということである。

複数葬法のうちもっとも頻繁に現われるのは，単純土葬と火葬の組み合わせで，26

表2　三つの葬法を同時にもつ民族

単純土葬	○	○	○	○	○	○	○	○	○					
火葬	○	○	○							○				
樹上葬	○			○	○	○					○	○	○	
舟（水）葬		○		○			○	○		○	○	○		○
ミイラ			○		○		○		○	○	○		○	○
食屍						○		○	○			○	○	○
計　25例	1	3	2	2	4	2	3	1	2	1	1	1	1	1

表3　二つの葬法を同時にもつ民族

単純土葬	○	○	○	○	○									
火葬	○					○	○	○						
樹上葬		○				○			○	○	○			
舟（水）葬			○				○		○			○	○	
ミイラ				○				○		○		○		○
食屍					○						○		○	○
計　102例	26	18	12	14	9	1	3	3	3	4	2	4	1	2

例ほどある。このうち Hawaii と Tasmanian を除く24例は東南アジアからのもので，この場合は，一般に土葬を主とする基層文化のうえにインドからの火葬文化が入った結果だと考えられよう。しかし，火葬が導入されたとき，土葬と火葬はたんに文化史的な重層の問題というよりは，当該社会においてそれぞれの葬法の意味にかかわる問題として現われるという点が重要である。たとえば，大林 [1977: 48] が指摘しているように，Karen では若者は土葬されるが，尊敬されるべき老人は火葬されるという事実，あるいは一般に火葬分布の周辺部では，首長，祭司，シャーマンのような特権をもった人物だけが火葬されるという事実は，土葬／火葬の対立が葬り方の技法というより死者の社会的地位にかかわる問題として現われるということを示している。ここでは立ち入る余裕はないが，さまざまな組み合わせの複数葬法のイーミックな意味について分析すれば，興味深い結果が得られるはずである。

3. 他　界　観

他界観についても，分布頻度の高いものからならべてみると，天上他界58例，地下他界41例，霊魂転生40例，山上他界29例，海上他界25例となる。

このうち海上他界は，東南アジア大陸部からは現われず，東南アジア島嶼部からが10例，残りの15例はオセアニアからのものである。それゆえ，海上他界は島嶼地域に偏って分布する他界観だといえる。さらにこの他界観はやはりオセアニア（とくにミクロネシア）に濃密に分布する舟（水）葬との関連性が指摘されている [大林　1977: 198]。しかし，入力データにおいては，両者がクロスするのは2例にすぎず，明確な相関性は認められない。

これにたいして，山上他界は焼畑耕作との関連が注目されている [大林　前掲書：155–156]。それゆえ，両者の重なりをみてみると，山上他界をもつ民族29例中22例は焼畑耕作を行なっていることがわかる。また，大林がとくに注目したオカボ栽培との関連は29例中19例となっている。この数字だけみると，かなり強い相関性を示し，大林の仮説を指示しているようにみえる。しかし，生業と他界観の相関性を検討するために表4を作成してみると，山上他界は焼畑耕作と相関性が高いとは必ずしも単純にはいえないことがわかる。すなわち，表4によると，山上他界をもつ民族29例のうち20例は，水稲耕作をも行なっている。また，山上他界がもっとも多く現われるのはサツマイモを栽培する民族においてであって，その数は24例にのぼっている。他方，焼畑耕作の側からみると，焼畑耕作を行なう150民族においてもっとも頻繁に現われ

表4　生　業　と　他　界　観

	海上他界	山上他界	天上他界	地下他界
採集・狩猟民　(1113)	3	3	5	2
タロイモ栽培　(1301)	21	23	36	27
ヤムイモ栽培　(1303)	17	19	22	19
サツマイモ栽培　(1304)	16	24	33	21
オカボ栽培　(1307)	6	19	30	22
雑穀栽培　(1309)	9	20	35	26
水稲栽培　(1310)	4	20	29	18
階段状耕地　(1311)	8	12	17	8
焼畑耕作　(1312)	16	22	30	23

る他界観は，天上他界の30例，ついで地下他界の23例，そして山上他界の22例とつづいている。

地下他界については，大林はオセアニアのイモ栽培との関連を示唆した［大林　前掲書：211］。表4によると，イモ栽培のなかでもタロイモ栽培を行なう民族が地下他界ともっとも高い相関を示しており，地下他界をもつ民族41例のうち27例はタロイモ栽培を行なっている。しかし，ここでもさきほどと同じ問題を指摘できる。すなわち，地下他界をもつ民族41例中26例は雑穀栽培を行ない，22例はオカボ栽培を行なっているのである。これらの数字はサツマイモ栽培の21例，ヤムイモ栽培の19例より多いわけで，入力データからはイモ栽培と地下他界との明確な相関をとりだすことができないように思われる。

このようにみてくると，生業と他界観についてなんらかの有意味な相関関係を入力データからとりだすことができるのかどうか，現在の筆者は断定することができない。おそらくしかるべき統計学的な処理を施したうえで，仮説を検討する必要があろう。

葬法と同様，多くの民族は同時に複数の他界観をもつ。海上他界，山上他界，天上他界，地下他界という四つのタイプの他界観すべてを同時にもつケースはないが，三つの他界観を同時にもつ場合が10例（表5），二つの他界観を同時にもつ場合が55例（表6）ほどある。

表5　三つの他界観を同時にもつ民族

海上他界	○	○	
山上他界	○		○
天上他界	○	○	○
地下他界		○	○
計　10例	4	4	2

表6　二つの他界観を同時にもつ民族

海上他界	○	○	○			
山上他界	○			○	○	
天上他界		○		○		○
地下他界			○		○	○
計　55例	6	9	4	11	3	22

こうした複数他界のうち頻度の高い組み合わせの上位三つは，第1に天上他界と地下他界の組み合わせで22例，第2に天上他界と山上他界の組み合わせで11例，第3に天上他界と海上他界の組み合わせで9例ほどある。すなわち，天上他界は先述のように58民族において現われるが，そのうち42民族は同時に他の他界観をももっているのである。

このような複数の他界観を同時にもつ場合も，複数葬法の場合と同様，文化史的な重層や異なった他界に異なった意味が付与されるということが考えられる。たとえば，天上他界と地下他界の組み合わせは，すでにみたように東南アジア・オセアニアにおいてもきわめてよくみられるが，棚瀬はポリネシアにおける天上他界と地下他界の対立をとりあげながら，つぎのように論じている。すなわち，オセアニアにおいては，この世の連続，あるいはよりよいところとしての地下という観念が地下他界の原型だと考えられるが，ポリネシアでは宇宙生成論と結合しながら，天／地下に光明／暗黒といった対立が加わり，さらに善／悪といった倫理的対立が加味されていった，と[棚瀬　1967: 823]。このような他界観の意味の変容や進化を入力データから検証することができればきわめて興味深い。しかし，それはここでの報告の範囲を超えている。